

福島勝彦先生の退職記念号に寄せて

勘 坂 純 市*

福島勝彦先生は、大阪大学大学院経済学研究科を修了後、1971年の創価大学開学と同時に経済学部にて講師として赴任された。その後、1975年から助教授、1983年から教授として学生の教育に取り組んでこられている。さらにその間、国際部副部長、教務部長、経済学部長、副学長補、副学長、創価女子短大学長と要職を歴任され、2015年の退職に至る44年間に亘り、経済学部のみならず創価大学、創価女子短大の発展のために力を尽くされてきた。

私事になるが、私が創価大学に奉職させていただいたのは、福島先生が経済学部長になられる前年の1994年だった。したがって、先生からは、大学教員としての基本的な姿勢を一から教えていただいた。やさしい暖かな眼で相手を包み込み、丁寧に話された一言ひとことは、いまでも大切な指針となっている。

そうしたお話の中でも感じたが、福島先生が一貫して大切にされているのは、「学生中心の大学」という創業者池田大作先生が示された理想であったと思う。かつて、福島先生は、次のように述べられた。「経済学には哲学があり、世界観があり、さらに言えばロマンがある。学生諸君にその壮大な経済学体系の世界に目を向けさせ、そこに新鮮にして深い喜びを見いださせることが、われわれの『仕事』の重要な部分でなくてはならないと考える。」（「創立30周年記念号に寄せて」『創価大学経済学部30周年記念論文集』2001年）学生中心の大学を目指し、「学生諸君にその壮大な経済学体系の世界に目を向けさせ」る経済学教育の実践は、福島先生ご自身がその範を示されてきた。今は経済学部の伝統となったゼミ対抗研究発表大会も、福島先生の発案からスタートしている。

いまでも、学生たちと経済学の「哲学」や「ロマン」を語り合っていた福島先生の姿が思い起こされる。福島先生が真摯に追及されてきた学生中心の大学建設の理想を、われわれも受け継ぎ精進してまいりたい。

*創価大学経済学部長、教授